

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2008年12月22日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信26号



- 08年6月～11月の活動報告(事務局) 1
- 第4回講座「コモنز村ふじわらー寺山峠と雨呼山の道普請」
・はじめての藤原・上の原(稲千賀子) 2

- ・「寺山峠と雨呼山遊歩道の点検作業」に参加して(武田賢)
- ・明川の風景と旧街道「寺山峠」(大坪祥一)
- 草原再生セミナー「なぜ私たちは草地を再生するのか」 7
- ・開催結果の概要報告(事務局)
- ・基調講演「森の国で野を守る意味と守り方」<要約>(事務局)
- ・草原再生セミナーで心に響いたキーワード(草野洋)
- 特集：日本初「茅刈り講習会&コンテスト」開催! 8
- ・開催結果の概要報告(事務局)
- ・写真で見る「講習会&コンテスト」(事務局)
- ・原っぱの絶滅危惧種、子どもたち!(阿部玲奈)
- ・今年も親子で参加した大草原の茅刈り(柏倉裕)
- ・一番印象に残った地元のおばさんの話(藤川あゆこ)
- ・茅刈りコンテストの感想(跡部喜美子)
- ・ススキ草原に響き渡る子どもの泣き声の温かさ(牧大介)
- ・生物多様性、ひとびと(上原健)
- 第7回講座「コモنز村ふじわら
ーかんじき雪原トレッキング」のご案内 12
- 会員・会友コーナー 13
- ・新入会員紹介、会員の消息～ビッグニュース、など
- ・寄稿「同行二人(4)涅槃編」(川端英雄)
- 編集後記 ～塾長のつぶやき～ 14

■ 2008年6月～11月の活動報告

事務局

- 6月14日～15日：第3回講座「コモنز村ふじわらー芦ノ田峠の道普請と生き物調べ②」。
- 6月25日～30日：日本自然保護協会、森林文化協会、森づくりフォーラム、樹恩ネットワーク、花咲村を歴訪、草原再生セミナーならびに茅刈り講習会&コンテストの後援、協力をお願い。
- 7月2日：第1回「全国草原再生ネットワーク」総会に浅川、清水参加、活動報告。
- 7月4日～5日：NPO 自然遊学と共催「初夏の水上交流会」。参加17名を真庭、清水が上ノ原フィールドに受け入れ、案内。
- 7月11日：麗澤中学1年生130名余の「水源の森フィールドスタディ」受け入れ。
- 同日：みなかみ町役場訪問、草原再生セミナーならびに茅刈り講習会&コンテストの後援、協力をお願い。
- 7月19日～20日：日本自然保護協会「モニタリングサイト1000」の説明会&講習会に海老沢、清水参加。
- 7月23日：川越小学校5年生26名の「里山探検隊」受け入れ。
- 8月17日：諏訪神社例大祭。内野夫妻、三好、清水が参加、伝承の獅子舞や奉納相撲を堪能。
- 8月26日：利根沼田森林管理署ならびに



同県民局を訪問。茅刈り講習会&コンテストの後援依頼。

- 同日：みなかみ町役場にて講習会&コンテストの役割分担のお願いと打合せ。
- 9月初旬：環境省、林野庁、里地ネット他を訪問、茅刈り講習会&コンテストの後援依頼。
- 9月13日～14日：第4回講座「コモنز村ふじわらー寺山峠の下見と生き物調べ③」
- 9月20日：草原再生セミナー「なぜ私たちは草地を再生するのか」開催。於、青山環境パートナーシッププラザ、参加53名。(p4～7ご参照)
- 9月23日：藤原の地元の皆さまと茅刈り講習会&コンテストの説明・事前打合せ。於、遊山館。
- 9月24日：みなかみ町商工会ならびに観光まちづくり協会訪問。茅刈り講習会&コンテストの後援依頼。
- 9月27日～28日：「全国草原シンポジウム in 東伊豆」に浅川、清水が参加。藤原での取り組み事例を報告。
- 10月11日：地元、町役場、町田工業、当塾の4者合同で「茅刈り講習会&コンテスト」の事前打合せ。於、遊山館。
- 10月11日～12日：第5回講座「コモنز村ふじわらー寺山峠の再生と生き物調べ④」、「利根川源流森林整備隊」発足式に北山、清水が参加、隊員登録。
- 10月25日～26日：「茅刈り講習会&コンテスト」開催。2日間の延参加・協力者158人。刈り取った茅411束(137ボッチ)は全量、諏訪神社の屋根替え用に地元へ寄贈の予定。(特集ご参照)
- 11月8日～9日：第6回講座「コモنز村ふじわらー茅ボッチの搬出と生き物調べ⑤」

以上

はじめての藤原・上の原

稲 千賀子

上毛高原駅から車に揺られ、ようやく着いた「上の原」。車を降り深呼吸をした瞬間、「シャキッ!!」と元気モードのスイッチが入ったようでした。そして勢いよく流れ出る湧水をのどを鳴らして飲んだときは“パワー全開”だったはずなのに、いざ刈り払い作業が始まると何の手伝いにもならず、ただついて歩いただけでした。

久しぶりに自然の中を歩き、ゆったりと流れる時間の中で、日頃忘れてしまっている穏やかさを感じることができました。特に二日目、雨呼山山頂から見た景色は感動的なものでした。そこまで登った私への“御褒美”かなと自己満足に浸っていました。ただ忘れてならないのは、その風景は単に存在しているのではなく、守り伝えようとする人々の努力によるものだという事です。それにしても美しかった……そして気持ちよかったです。

今、世間では「自然とのふれあいの中で子供を育てよう」と言われています。でも「ふれあい」とは何でしょう？ どうも一方的に楽しむだけのレジャーになっているように思われます。今こそが、自然(森)を見詰め直すラストチャンスではないのでしょうか。今回の活動に参加させていただき、そんなことを考えました。お世話になりました皆さん、ありがとうございます。

それにしても「森林塾青水」のみなさんのフットワークの良さ、若々しさには驚かされました。



の対比が見事でした。茅原の茅はもちろん茅葺に利用されていました。

観光関係の仕事柄、サラリーマン時代にはこの故郷の自然環境を生かした地域復興、なかでも「後立山展望のフットパスと地域ぐるみの山村生活博物館」構想（茅葺家屋の復活などを含む）などを地元の友人たちに焚きつけていたのですが、ほとんど相手にしてくれませんでした。ところがこの春に前記の服部先生の著書を友人に送り、先生にも街道開削の希望(夢)をお伝えしたところ、ひょんなことで地元禅通寺の住持が「鎌倉街道シンポジウム」を企画しており、11月初旬に先生を講師でお呼びするとの連絡が入りました。友人も古老を訪ねての街道開削にいたく興味を示しました。

さて、以上で“フットパス・ススキ・旧道復活”と三つの参加動機付けのキーワードが揃いました。私たちのプロジェクトがどんな成り行きを辿るのか皆目見当が付きませんが、今回の講座に参加させていただいた中で、とても大きな収穫がありました。それは地元との交流がなくては、事は進捗も成就もしないということです。行政や研究者、地元出身の都市住民など、夫々の思いや繋がりのおかげで地元との交流を深めてこそ持続性のある地域活動が可能になるという事実の重さに改めて気づきました。

森林塾“青水”のパンフレットにある地元住民・みなかみ町民・利根川下流住民などの表現に込められた皆様の意図が「飲水思源」の言葉とともに実感できました。改めて清水塾長を初めお世話になりました皆様に深くお礼を申し上げ、合わせて今後の塾のご発展を祈念申し上げます。ありがとうございました。
(2008・9・16)



寺山峠と雨呼山遊歩道の点検作業」に参加して

千葉県我孫子市在住 武田 賢

フットパス再生「ススキ草原再生と、地域に残る旧道(峠道)の復活などを目指す実践講座」と銘打った、機関紙グリーンパワー9月号の案内記事を見て参加を決めました。

動機付けのキーワードは“フットパス・ススキ草原・旧道復活”の三つでした。

私の故郷は旧岐阜県神岡町、越中(富山県)に境する奥飛騨の山里です。ここに「山之村」と呼ぶ山上盆地(海拔1000m前後)があります。昭和30年代には1000人を超えた人口も現在は200人以下の集落。3本の入村道はいずれも峠越えの険路ですが、ここはかつて松本平と越中をつなぐ鎌倉街道の道筋にあたるといわれます。(九州大学大学院の服部英雄先生著「峠の歴史学」151頁)

高校時代、たびたびこの集落を訪ねて伊西(いにし: SL1240m)と呼ぶ峠道を越えました。尾根筋からは御岳山や乗鞍岳の山塊、北ノ俣岳・黒部五郎・薬師岳など後立山の稜線が展望できました。峠下には豊かな茅原が続いて、晩秋には後立山の雪線と

室町時代（永禄年代）旅人が武具（日本刀、火縄銃など）をこもに包み、百姓姿に身をやつし、越後から明川の地にわらじをぬいだ。明川の本流（大ぜき）近くに1軒のほったて小屋を建て、猟をし山菜を食すかたわら、田畑を少しづつ開墾した。人が明川に住みついた始まりである。



江戸時代になると、2軒3軒と軒数が増え、江戸時代後期には、10軒程度になり、田畑も広がった。

明川という地名は、川の名前と同じである。水源は熊穴から上の原に到る途中にある。清水は大木の根元から、こんこんと沸き上がっている。水源から流れにそって下る水路は、そり立った山の谷間にあり、熊が出そうな、昼もうす暗い藪である。その谷間を抜けると、天地が、ぱっと広がり、急に明るくなる。その空間が、明川である。（標高 800m.弱）川は利根川につながっている。

江戸時代、田畑が広がり、人口が多くなると、明川の本流（大ぜき）から2本の支流が必要となった。生活用水として、各家に届く水回りと、水田用の水路である。この2本の人工的な支流は、村人が力を合わせて作ったものであろう。上流に分水路があり、明川の本流（大ぜき）から必要に応じて水量を調節し、今でも活用している。上水道は、今では、水源から神社前の水槽のため、いただいている。

茅葺き屋根 囲炉裏 水車(しったたき、ばったり) 石臼 むしろ はかま もんぺ じゅばん はんてん ののこ 薪 牛馬 そり かっちき 大ぐつ ござれ たがま ざま くわ よき のこ うす はち 桑 蚕 稲ワラ 茅場(森の平) 炭焼き きんま引き おす ためかつぎ など 昭和年代戦後まで日常みられた風景である。

黒モチ 赤米 ノギ米 あわ ひえ そば 大豆 小豆 などの穀類も田畑一面に作られていた。あけび やまぶどう うど わらび ぜんまい うり くり とちのみ などよくとれた。

戦後、農地が整備され、機械化が進むと農法も変化した。ダム 道路 家電化 ガス 水道 電気 車 テレビ 洗濯機 レンジ 電話 スキー場 ゴルフ場 温泉民宿など仕事の多様化、生活様式の変化により人々の意識も変化せざるを得なかった。

岩魚 ドジョウ イモリ タニシ カエル 蛍 赤トンボ 熊 猿 イノシシ かもしか きつね たぬき いたち うさぎ リス ヘビ トカゲ トビ ワシ きじ かけす カラススズメなどの動物相も変化した。里村の小動物群が減少し、熊 猿 イノシシなどの害がふえた。

旧街道は、本道として南北を通る『寺山』がある。明川南面の前山を越えると、お寺に通じていた。明川北側には、大沢、大芦、湯の小屋の村々に通じている。かつて、本道



『寺山街道』は人々の往来でにぎわっていた。東側には上の原、茅場（森の平）、山菜とりなどの街道として『熊穴』があり西側には、『大谷地』というだいろくでんに通じる街道がある。今では使われなかったり、道路に寸断され不能になっている。

旧街道の本道『寺山』には、道わきに 道祖神 石仏、前山の山頂に十二様（じゅうにさま）など願いの込められた石仏が時代をみつめ続けている。

明川の東側には、鎮守の杜に『榛名神社』がある。昔は神社の前に中2階の奉納殿があり、獅子舞を奉納した。人々の交流の場、恋の場、縁結びの場とし、霊験あらたかな神社としてにぎわっていた。今でも毎年春になると天下泰平・五穀豊穰を古式に従って祈り、神事を続けている。神社の裏山の丘には、奥の院が静かにたたずんでいる。

明川中央にある豆桜は、江戸時代より村人や旅人をなごまし、やすらぎをあたえ続けている。明川南面前山に藤左衛門桜が対をなし、室町時代より明川を見守っている。山桜の大樹が山のあちこちにあり、春の明川を染めている。



平成 19 年から明川桜の里をめざし、千本以上の桜の植樹も間近である。遊歩道として、前山・寺山・大谷地新道の完成も間近である。

時代が進むほど、激変する明川の風景。次は、どんな風景になるだろうか。

草原再生セミナー「なぜ私たちは草地を再生するのか」

セミナーの概要と結果の報告

事務局

- 9月20日(土)、青山の環境パートナーシッププラザにて開催。
- ①基調講演：高橋佳孝「森の国で野を守る意味と方法」
 - ②報告：地元代表 林 親男（藤原案内人クラブ代表）
茅葺き業者 町田 茂（町田工業社長）
環境行政 笹岡達男（(財)休暇村協会常務理事）
 - ③パネルトーク：上記4人の講師・パネラー
 - ④質疑応答：講師・パネラーとフロア
 - ⑤総括コメント：原 剛(当塾最高顧問・早稲田環境塾塾長)

※セミナー終了後の交流会も含め、北は北海道から南は名古屋まで各地から53名の熱心な皆さまの参加・協力をえて盛会裡に終了。ご後援をいただきました。多くの関係団体の皆さまに、この場を借りてあらためて厚くお礼申し上げます。



高橋佳孝先生の基調講演

「森の国で野を守る意味と守り方」(要約)

身近な里山の中にモザイク状の草地

世界遺産になった石見銀山。当時の周辺環境を調べてみたところ、6つのムラの大きな植生は草山だった。鉱山で働く人の20万人を養うために農地がある。その農地を支えるために草が必要だったからだ。阿蘇などの広い草原だけでなく、日本にはかつて、自分たちの身近な里山のなかに比較的小さな草地がいくつもモザイク状に分布していた。

自然再生のホットスポット

牛馬のえさ、敷わら、堆肥、屋根の材料、秋の七草などの薬草——。草は日本人の暮らしと深くむすびついていたが、代替品が開発されたりして草原が必要でなくなっていった。草原は戦後、どんどん減っていくことになる。

どれくらい減ったか。現在の日本の草地面積は国土の1パーセントくらいだが、大正時代には国土の11パーセントが草原だった。明治時代と現在の国土利用の比較では、農地も森林もさほど減っていない。いちばん減っているのが、草地と湿地。どちらも守るべき動植物がかなり集中分布している場所＝自然再生のホットスポットになっている。

小さい面積でたくさんの絶滅危惧種を養う

絶滅が危惧される植物はどんな場所に多いのか。中国地方で調べた例がある。いちばんは森林。面積も大きいからだが、800種くらいある。農地、湿地、草地は約300種だから、こちらもそこそこある。これを単位面積あたりの数にすると、湿地とか草地に絶滅

危惧種が多い。だから森林より草地の方がいいというのではない。草地は、小さい面積を守るだけで、絶滅危惧種をたくさん守ることができるという価値がある。わずかにしか残っていない草原をこれ以上だめにしてしまったら、せっかく守られてきた地域の生物多様性が失われてしまう。

責任あるツーリズム

それではどう維持するのか。火入れ、採草、放牧の3つが効果的だが、問題はこうした人為的撹乱が維持できるかどうか。農家や畜産農家だけではすでに草原は維持できない。農家を主としながら、市民を含めた新しい管理の担い手をどう作るか——。その一例に阿蘇の例。年間2000人もボランティアが野焼きや防火帯づくりに参加する。彼らは一種のツーリスト。「責任あるツーリズム」の実践者だ。

草原の多面的な価値＝生態系サービスを理解する、活かす

市民は、消費者や納税者としてかかわることで草原維持に貢献できる。たとえば「阿蘇の草原で生産されたあか牛を食べて草原を守る運動」。草原のさまざまな価値を理解した購買活動が、農家を支えることになる。草原への「環境支払い」も、納税者としての国民が理解すれば可能だ。

採草地の草で作った野草堆肥を利用して農産物を生産している事例。「草原再生シール」を張って農産



物を販売する会が阿蘇にある。草原の持つ生態系サービスをブランドとして消費者に訴える取り組みだ。

草の文化を子どもたちに

広島県芸北の雲月山（うづきやま）。山焼きをして草原を守っている。地元の小学校の子どもたちもかかわっていて、山焼きが作った雲月山の自然をテーマに子どもたち演じるオリジナル劇は感動的だ。草の文化、草を利用する心を次世代へ伝えるには、地域の子子どもたちに体験してもらおう仕組みをどう作るかが重要だ。

事務局（海老沢）

草原再生セミナーで心に響いたキーワード 「なぜ私たちは草地を再生するのか」 草野 洋

草原再生セミナーの開催に当たり主催者から問題提起されたのは「なぜ私たちは草地を再生するのか」でした。いわゆる研修などでよく使われる「問いかけ」であるがこのセミナーではこの問題提起と講師の方々の報告に出てくるキーワードがうまく絡み合っ

て最後まで満ち足りた時間を過ごしました。各参加者が捉えたキーワードはその想いや動機によってそれぞれしょうが、私は、40年間携わった森林・林業と重なったキーワードが心に響き、「なぜ再生するのか」の答えを求めて整理してみました。

モザイク

まず、捉えたキーワードは「モザイク」でした。報告のスライドの中でも、風景や草地の利用の仕方の結果としての植生などに「モザイク」が出てきました。

私の脳裏にある田園風景は集落の背後や周囲に「森林」と「田畑」、そして野草の花が咲く「草地」がある風景です。人と自然が密接に関わって形成される風景は自然にモザイクとなっています。

酪・農業と草地、林業と草地、住生活と草地の係りの結果として人々の営みに便利で合理的な配置が「モザイク」となり、周囲と馴染んだ美しい風景が形成されたのではないのでしょうか。

北海道美瑛町のパッチワークの丘は私の大好きな風景です。ここは輪作や農作物の選択の結果、営農そのものが半自然的に「モザイク」となってすばらしい風景になっています。

また、宮崎県諸塚村は人工林（スギ、ヒノキ）と天然林がモザイク状に配置された美しい山村風景の中で木材やキノコの生産、農業が営まれる森林理想郷となっています。

これらのモザイク状の景観や森林風景を見れば美瑛や諸塚の人々の心の豊かさや生き方を感じることができます。



「モザイク」は水平、垂直に、時間の中にもあります。そしてモザイクの中にもモザイクが存在するという豊かな構造をしています。

このモザイクが今あらゆるところでおろそかになっているのではないのでしょうか。

私たちはこれまで「モザイク・パターン」を「モノ・

パターン」にすることが合理的と考えて、さまざまなものを単純で一斉なものに変えてきたのではないのでしょうか。それが自然界のみならず教育・経済などにもさまざまなひずみを生じさせているのではないかと。

草地が自然・風景の中のモザイクとして、人と自然の係わり方が生んだモザイクとして存在し続けることが人間と自然が健全に関わりあっている証であって、報告にあった「**モザイク性が多様性を生み出す**」のキーワードにつながります。

これらのキーワードは、たとえ小さくても縦・横・時間のモザイクをもつ草地を何とかしたいという想いを強くさせました。

私は、40年間、現場で伐採・造林をはじめ行政マンとして森林・林業に携わってきました。

職に就いた頃は拡大造林の最盛期であり、水平的にも垂直的にも時間的にもモザイクに手を入れ人工造林という非モザイク状の森林を造成した一人でもあります。かといって、これまでの行為を後悔しているわけではありません。このことは次のキーワードである「無用と有用」で述べてみます。

無用(不要)と有用(必須)

セミナーの資料によれば明治17年の原野は国土の3割に及んだとされている。そして昭和35年に120万haであった「森林以外の草生地」は平成12年には43万haと国土面積の1.1%に過ぎません。

草地は昭和30年代後半から50年代前半までに急激に減少していますが、この中でも里山（主に民有林）にあった草地の減少によるものが大きなシェアを占めています。この時期に世の中の「無用（必要なもの）」と「有用（不要なもの）」の間に大きな変化があったことを物語っています。この失われた草地も大昔はその大半が森林（自然林）であったことでしょう。

人々は人口の増加や農業の営みが拡大するに伴い草地が必要となり森林を草地にして手を入れて森林状態にならないようにして草地を維持させてきました。耕地の周りの森林は、「有用な草地」に対して「無用（邪魔）なもの」として開墾や火入れで森林になるのを妨げられてきました。

当時の人々にとって草地は「有用（必要なもの）」でした。食糧、家屋・屋根材、燃料、肥料、飼料、放牧として生活に欠かせない資材の供給源として、農地と一体として「利用を通じて管理」されてきたものでした。

その時代には多様な生物を棲わせる目的などたぶん眼中になかったでしょうが草地に咲く草花を季節や気候の良し悪しを知る指標として、草地に住む小動物や山菜は食糧として暮らしの中に織り込んで有用なものとして認めていたことでしょう。

「有用（必要なもの）」から「(不用) 不要なもの」への変化は価値の変化でもあります。

価値は時代や人々の想いによって変化するもので、新たな価値が再認識されることもあるので「無用な

もの」が「有用なもの」へ変わることもあります。それが少なくなってくるとなおさらです。

これらの草地は、やがて、高度経済成長に伴って、一部を除き草地としては「無用なもの」として植林や放置により森林化され、また、リゾート開発などにより減少していききました。

この時期は、木材需要の増大に応える木材資源の培養と国土の保全のための拡大造林が隆盛をきわめ、草地は「有用（必要）でないもの」として忘れられ「モザイク性」を失っていききました。



私は前述したように拡大造林の一翼を担った一人であるが、当時は「有用（必要）でないもの」を対象に「有用（必要）なもの」「有用(必要)とされるもの」を作ってきたのであって、それはそれで是としています。

諸先輩とともに心血を注いで造成した森林が今日、木材資源として、また、CO²吸収源として経済や地球環境に貢献する兆しが見えていることに意を強くするまでもなく過去の行為を誇りに思っています。しかし、それは「有用（必要）なもの」の視点から言えることであり「有用でないもの(有用でなくなったもの?)」に対しての配慮に欠けていたとの反省もあります。それは、「有用でないもの」の存在意義の本質、隠れた価値に目が届かず失われていくものや大義名分の影になって無用とされたものを気にならなかったことです。

今、草地に何かをしないではいられない想いは、失ってみてわかった大切なものへの贖罪かもしれません。

気づかないうちになくなっていくもの

トキが再び大空に舞いましたが朱鷺色がよみがえるために如何に多くの時間と労苦が払われたことでしょうか。

草地についても失われていくことに 40 年間も気づかないでいて今更遅すぎる行動かもしれません。

草地とそこで為された生活を支えた作業は、まさしく、気づかないうちになくなっていく風景や暮らしの象徴ではないでしょうか。まして、人との係わりでしか維持されない草地ですから気づいた時にその想いを形にすることが大切だと思いました。

小さなものに大きなキャパシティ

気づかないうちに失われていった草地は全国に 120 箇所余りが何らかの形で残されているそうです。全国規模でのモザイクとしてはいかにも心もとないがこの小さな存在が大きなキャパシティを持っていると知って改めて草地の存在の大きさに驚かされました。

それは生物の多様性の宝庫としての草地です。小さな面積でも草地には広大な森林に匹敵する多くの希少な生物が棲息しているという。いまや希少となった草地ですから種数は森林にかなわないでしょうが単位面積あたりの種、なかでも絶滅危惧種が多いことは小さな面積で大きな収容力（ポケット）を持つ自然として存在意義が高いことを意味しています。

生物多様性の保全という目的の対象としては効率的で高品質であり、保全活動の場としては国・地方の施策とも合致するものです。

「どっこい意外なススキのバイオマス量」

ススキのバイオマス量は 4.02 t、アカマツは 3.9 t とのことススキの底力を知らされました。

「草地は火入れや放牧、採草などにより植物間の競争が緩和されることで特定の種による資源の独占が妨げられ、たくさんの植物が生育できたのである」

人工造林はこれとは反対にある種（スギ、ヒノキ）を独占させるために下刈などの作業で作り上げるものですが多大な労力のわりにはバイオマスにそう差がなかったのはちょっとショックでした。

草地の優れた新しい価値を再認識すべき時期だと思えます。

自然の力・郷土の力・人の力のバランス

有用なものとして「営みによる維持・管理」がなされてきた草地が「生物多様性の宝庫」という新しい価値を得て「守る対象」として市民の目が注がれています。

しかし、「営みによる維持・管理」が行われてきた草地を「守る対象」として維持するには大きな壁があるような気がします。

それは「継続出来るか」ということです。昔のような「営みによる維持管理」だけではベネフィットとコストのギャップが大きすぎて長続きしそうにありません。

有用とされた時代までの草地は、自然の力と地域の力で有用なものとして維持されてきましたが過疎化や高齢化によりそのバランスは崩れています。

郷土としても新しい価値やベネフィットを付加して必要とするものに変えなければなりません。

それは、グリーンツーリズムや有機酪農業であり、そこにしかないもの（地域ブランド）を持つことかもしれません。このような草地を必要とする意識をもった地域とそれに共鳴する都会の人々などのボランティアが協働で維持・管理(利用)する時代だと思えます。

特に、郷土の人々の心とベネフィットが草地を必要としないならば草地は動けないものですし自然の力をコントロールすることに不得手なボランティアだ

けでは長続きしないと思います。

食の安全が脅かされている中での安心・安全な農産物の供給、高ストレス社会にあって心のふれあいを求めるグリーンツーリズム、そして未来からの留学生である子供たちの情操を育むための草地としての価値と利用法を構築することが重要です。

セミプロの出番

郷土とボランティアが価値を共有しながら協働していくと市民側には市民的な価値や目的だけでは満足しないものが出てくるでしょう。その中から必然的にセミプロとなるものが出てくることでしょう。

セミプロは継続の人であり高齢化や過疎化あるいは営農者の休養休暇に対するサポーターの役目を果たすばかりでなく新規参加者の指導者として人の裾野を広げる役目を果たすことになります。

地域に信頼され密接な結びつきを持ったセミプロ達とボランティア感覚の市民が協働して新たな営みをしていくようになれば少なくとも今人々が係ろうとしている草地は新たなスキームで維持・管理されていくようになることでしょう。

子どもたちの歓声

「阿蘇の子供たちの総合学習に知床の自然を題材にするような愚かな環境教育がおこなわれている」との報告があったがその土地で、先祖や祖父母・親が接して心の DNA に影響を与えてきた身近な自然や営みを



題材にしてこそ効果がおおきいでしょう。

彼らを草地に引っ張り出し都会の子供たちと交流させながら将来の後継者群を育てることが大事です。

その子供たちのたとえ1%が草地に関心を持ち筋金入りのプロ（地元）セミプロ（市民）の核となれば持続的な草地の維持・管理ができるのではないのでしょうか。

森林の造成に天然更新という施業があります。この施業がうまくいくかどうかは次代を担う群（後継樹）がどれだけあるかで決まると言われています。

「山地酪農の牛が草地再生ビジネスとして有力なブランドに」

「外国産の牧草は牛が流産しやすい」

この言葉で私が中学・高校と親父から肥後赤牛の飼育を任されたことを思い出しました。市場から数十万円の子牛を買ってきてそれを育てて子牛を産ませるのですがその責任者が私であり、えさ、運動、敷き藁替えなどは中学生にとって結構つらい仕事でした。

燕麦、レンゲ、ススキなど青草の豊富な季節はいいとしても生き物を飼っているのですから冬場のえさ（青草）の確保には苦労しました。もっぱら山でアオキ（林内に生える下木）や畦で彼岸花の葉や日当たりのいい草地でわずかに生える青草を採取したりして藁と混ぜて餌としました。

純粋な地場産の飼料で育てていたわけで流産などさせたら大変なことで子供を産ませて市場に出して好い値がつくように家族中で懸命に世話したものです。

コモンズ

「地球そのものがコモンズ（共有地）である」とのキーワードを新聞紙上で見つけました。そのコモンズがコモンズのままで残るように価値観やライフスタイルを転換すること、コモンズが汚染したり枯渇したりしないように人類が協定を結ぶことが求められていると主張していました。

水や緑で縁のある郷土の「モザイク」を郷土の人と市民（よそ者）が新たな価値を付加したコモンズを「有用」なものとして心と力を合わせて継続させていくこと。

上の原の茅場の再生は新たな「コモンズ（共有地）」としての試金石であり、萱場を通じて気付かないうちに失われていくものの大切さを知らしめるための活動ではないでしょうか。

何らかの目的をもって草地を維持させる場合は積極的に人が関与しなければなりません。目的・目標があれば「ほっとけ草地」にはしないでしょう。

これからの草地の維持・管理の活動は、目的を明確にし、新たな価値を含めて具体的に関連農産物の商品化、子供たちの参加プログラムの作成などを目標にすることも大事だと感じました。

上の原の草地には「藤原の人々の心の拠り所である諏訪神社をはじめとする伝統的重要建築物の茅葺き屋根の修復」「藤原の魅力を広めて藤原の元気を取り戻す」というやりがいのある目標があります。

「なぜ再生するのか？」の答えはこれらのキーワードに表されていますが私にとってはこれらのキーワードが心に響きむしろ「心の再生のため」と言いたいぐらい精神的な面が大きいように感じています。

強いてまとめれば、草地をすぐそばにいない私たちが生きるため、そして地元の藤原にとって「必要なもの」するため……。

このセミナーは藤原の皆さんと協働して草地の再生の歩を進める「森林塾青水」への参加意識が大きくなったセミナーでした。

特集：日本初「茅刈り講習会＆コンテスト」開催！

開催結果の概要

事務局

開催結果の概要を以下に記します。ご後援・協力いただきました多数の団体・関係者の皆さまのお陰をもちまして、無事かつ盛況裡に終了することが出来ました。紙上を借りてご報告かたがた厚くお礼申し上げます。

10月25日（土）－講習会：参加者 39名
26日（日）－コンテスト：参加者 47名・・・

延べ参加者 計86人！

親子連れの参加者が5組あり、地元の皆さまに喜ばれました。他に、地元の藤原案内人クラブ・民宿組合・諏訪神社氏子総代や住民の皆さま、みなかみ町役場、写真愛好家、応援・見学者ならびに後援・協賛団体、報道関係者など、2日間の合計延べ参加・協力者158人に及ぶ多数の皆さまのお力添えをいただきました。大変ありがとうございました。

コンテスト入賞者は厳正審査の結果

- 総合・最優秀賞 阿部玲奈さん
- 一般の部1等賞 有島靖賀さん
- 2等賞 岡田光二さん
- 3等賞 北山郁人さん
- 女性の部優秀賞 尾島キヨ子さん
- 児童の部優秀賞 河野 暉 くん
- 団体の部優秀賞 npo 花咲村

2日間で刈り取った茅は
合計137ボッチ×3束＝411束 全量、諏訪神の
茅葺き屋根替え用に地元へ寄贈予定です。



写真で見る「講習会＆コンテスト」



原っぱの絶滅危惧種、子どもたち！

—初参加、そして最優秀賞の弁

阿部玲奈

初めて参加させていただきました、1歳3ヶ月の男の子と新米夫婦の家族です。

今回の参加は直前になって決めたのですが、それには以前より夫と関わりのあった清水代表から一本の電話をもらったことにあります。「阿部くん。この活動でフィールドに出てきて思うことなんだが、いろんな生き物たちが絶滅危惧種だと言われているが、野原での一番深刻な絶滅危惧種は、『子ども達』なんだと最近思っているんだよ。」と。それを夫から伝え聞いて、即答したのです。「うちの絶滅危惧種を連れてきますっ！」

★張り切っていたのは、夫でもなく子でもなく実は私。。。「茅刈り」といっても、こんなに大きなものとはイメージしていませんでした。背は想像以上に高く、ポッチも太く大きく、初日の練習では、こりや大変だあというのが単純なる感想。子もいるし、体験できただけでももうけもんだ、なんて気分でしたが、二日目のコンテストでは、子が夫の胸で寝たのをいいことに、思いっきり楽しんでしまいました。



初日の練習茅場とは違って、茅も高く揃っていて急にやる気ができました。こういうのはかなり没頭してしまうタイプです。とくに刃物の使い方。教えてくれる講師の方々にしつこく聞いて

てまわり、じっくり観察し、自分の中ででも角度や力の入れ方挽き方の微調整。すると、やってきましたザクザクと切れる瞬間が。この感覚を掴むと刈るのがおもしろくて仕方なくなる。

ポッチの作成も、刈った側から雑草や枯れ葉を落として、茎を揃えてため込み、ギュギュッと密度のいい束を目指す。ポッチはさすがに講師達の手を刈りつつも、制限時間いっぱい、ゼッケンの掛け方バランスにまで気を使った。こういう見た目は大事！でも、自分でもかなりの納得の品。気分上々に、子が居たことさえすっかり忘れていたかのように、没頭させていただきました。

実はとっても寒い日だったのに、汗をかいて寝る子のもとへ。なんともすがすがしい気分です。焼きたおにぎりと温かいきのこ汁がなんだか忘れられません。ゼッケンをつけたまま子を抱き続けた夫には申し訳ないですが。。。

そして、こんな初めての体験と共に楽しみにしていたのが、人との出会いです。様々な想いでやってくる人々。思いがけない懐かしい出会いもあり、たくさん

笑わせてもらい、皆さんより先に帰路につきました。「何かしら入賞はしていると思うんだけどなあ」、などという後ろ髪引かれる思いもありつつ。。。。

★家族ができれば、フィールドを持って、こどもと一緒に自然体験をするともに、私達大人も勉強になりそして何かの役に立つことをしていきたいと思っていました。学生時に森林ボランティアをやっていたこともあり、東京に住む私達としては、私達の飲む水を支えてくれている森を守る活動ができれば、たくさんの学びと遊びと仕事ができるので一石何鳥にでもなると、ぜひそんなフィールドをもちたいと思っていました。

そんな思いを、実はこの団体も信念として持っていたということが、実はとても気に入っている点なのです。『飲水思源』(いんすいしげん)。間伐やなんやらは、急峻な山の中に入らなければできないけれど、この茅刈りならば、小さな子でも同じ場にいることができる。我が子ももう少し大きくなったら、草むらの虫取りをしたり、小川で遊んだり、ススキや植物で何か編んだりもできるかもしれない。初めてのフィールドだったけど、これから子と共に過ごすのにすごくいいフィールドだなあと思ったのです。

★最後に、帰宅後、思いもよらず、最優秀賞のご連絡を頂き、たくさんの恵みを送っていただきました。講師の方々、スタッフの皆さんには本当にお世話になりました。水上温泉のチケットと共に、またゆっくりふじわらの地に遊びにいかせていただきたいと思っています。ありがとうございました。

今年も親子で参加した大草原の草刈り

柏倉裕

群馬県利根郡みなかみ町藤原字上ノ原。ここに「森林塾青水」のフィールドがあります。

坂東太郎・利根川の源流域、広さ21ha。ミズナラを中心とした広葉樹の森と、ススキ草原が広がるフィールドで、今年も息子と茅刈りに参加しました。



この草原で先人たちは茅(ススキ)を刈り、これを葺(ふ)いて茅葺き屋根に利用してきました。雪が解けた春先には野焼きをして、良質なススキの草原を雑草木から守ってきたのです。

標高1000m。今が紅葉のピークで、山々はまるで錦絵のよう。一年ぶりの茅刈りは、体が思い出すまでに時間がかかり、大変でした。まっすぐに伸びた茅を脇から抱えて刈り取り、これを集めて直径20cmほどの束にします。それを三束、ピラミッドのように縛り立てたものを、ポッチというそうです。普通の茅葺き屋根を葺くのに、なんと3000ポッチが必要との

こと。気の遠くなるような作業を、地元の人たちは共同で行い、暮らしを守ってきました。

教わりながらですが、やってみると、まことに重労働です。しかもまともなボッチさえ作れない、というのが正直なところでした。しかし、いい勉強になりました。ここでは「飲水思源」がモットーとのこと。文字通り、水を飲めば源を思うべし、ということです。

このイベントは老若男女何でもありで、本当に楽しく、心にストンと落ちました。わが息子も今回で三回目。ボッチづくりを覚えてくれたおじさんたちの優しい笑顔は、なんとも表現のしようがありません。ぜひ、一度ご参加あれ。(Yu)

「PS 進行役をなさった川端さんの、超真面目な言葉遣いからいきなり飛び出すダジャレは最高でした。清水塾長との掛け合いは、森林塾青水のもうひとつの売りだと確信いたします」



一番印象に残った地元のおばさんの話

藤川あゆこ

今回の参加で一番印象に残ったのは、地元のおばさんとの交流である。ここのお年寄は都会のお年寄に比べて、体・頭・心、全て数倍元気である。「若い者は学校を卒業すると仕事がないから、みんな都会へ行っちゃうんだ」。都市への人口集中問題。新しい技術や製品、多くの情報も都市から入ってくる。20、30年後、ここに住む人はどの位いるのだろうか。

茅刈りコンテストにちなんで、茅の話もした。「昔はたくさん茅を刈ったものだよ、今度刈った茅を使わせてもらうから、少しでもお手伝いをしようと思ってね」と、彼女の参加理由を聞く。「昔は今ゴルフ場になっている所辺り帯が茅地でね、みんな総出で刈ったもんだけど、あそこは売ってしまったんだよ、もうすぐつぶれそうだね」と、今後の土地利用についての不安が洩れる。

かつて国の政策によって山で植林が進められたように、CO₂削減に向けた二酸化炭素の固定や吸収源、バイオマス資源の可能性として草原の価値が賞賛されれば、この地域に変化が現れるかも知れない。個人的には気候変動の人為的要因、化石燃料を人類が短期間に使用してきたという問題の根源を絶つとは思えないが。

このすすき草原の今後の変化を、次世代の人々はどう評価するのだろうか。時の流れを見守ってきた老人



の話に、自分が年老いた頃の藤原地域を想ってみた。

茅刈りコンテストの感想

跡部喜美子

「茅刈りをしている『飲水思源』を標榜している団体」よく分からないまま、私のHPに参加していただいているので一度はと思って伺いました。もっと堅い雰囲気を想像していましたが、なんと優しい、柔らかい、バルーンの中にいたような心地よさでした。清水さんの人柄によるのでしょうか、リピーターになる人の気持ちが分かります。日程自体はもったいないくらい待ち時間が長くもっと作業をしていたかったと思いました。コンテストの集計なども反ってアナログにざっくり判定しても誰からも文句は出なかったと思います。コンテストをしなくても茅刈り大会でも人は集まるのではないのでしょうか？ですがあの必死の作業を思い出すと何とも楽しく、面白く感じてはいるのですが。薄は見るだけで刈ったり抱えたりすることも初めて、あれほど強いものとは知りませんでした。薄を屋根葺きの材料に使った先人の知恵には感服します。学ぶことの多い2日間でした。



ススキ草原に響き渡る子どもの泣き声の温かさ

牧 大介

10月24-25日で、現代版「入会慣行」などで知られる森林塾青水という団体の活動を視察させていただきました。東京という世界的にも巨大な都市が存在できている背景には豊富な水があります。その水の8割は利根川に依存しているということです。

森林塾青水は、その利根川の源流域にあるみなかみ町にて、「飲水思源」を合言葉に、利根川でむすばれた上流部と下流部の住民が、一緒になって里地の保全と活用に取り組んでいます。地域を越えたメンバーシップによって、地域の自然や文化を共有していくという活動に前から関心があり、随分前から自分自身も会員にならせていただいていたのですが、今回ようやく現地に行くことができました。

今回は大変ありがたいことに、森林塾青水の清水代表に丁寧に現地をご案内いただき、たくさん関係者に会わせていただきました。数百年かけて日本人が維持していき、人が自然との関係を丁寧に丁寧に積み重ねてきたことにより形成された、美しい風景がそこにはありました。初めて見る風景なのに、なぜこんなにも懐かしく感じるのかということに驚きながら、紅葉に彩られた山里の風景を味わいました。

しかし、過疎と高齢化が進み、かやぶきの屋根が崩れている廃屋もところどころに。



「なんとかしたいが、なんとかかなると思えない・・・、みんな地域からだんだん人がいなくなるのはもう仕方ないと考えている」

「仮にいい知恵があっても、動く若いもんがおらんとどうしようもない。

子どもを生んで育てながら若いもんがここで暮らすには、仕事がない。」

こんな前向きに考えながらも悩み続ける地元の声を聞きながら、藤原地区の茅場へ。ここは、茅葺屋根の茅（ススキ）をとるために地域の入会として管理されたきた場所。放置されていたその場所で、森林塾青水は火入れを復活させ、さらにそこで生産した茅を重要文化財を維持するために供給したりもしています。

10月25日は、森林塾青水が主催する日本初の茅刈コンテストの初日でした。私も茅刈の体験を少しやらせていただきました。小さな子どもを二人連れて、この地域に移り住むことになった夫婦も茅刈のイベントに参加していました。彩り鮮やかな山、そのふもとには日に照らされて輝くススキ草原、茅刈を楽しむ人たち、そこに響きわたる子どもの泣き声。子どもは何かを訴えたくて必死に泣いているのですが、その泣き声のおかげで、とても温い気持ちになりました。

この地域がこれからどうなっていくのか、どうしたらいいのか、すぐに答えはでないかもしれませんが、でも、子どもの泣き声が響いているんだから、なんとかかなるはずだ。

直感的にそんな予感をいただきながら、現地を後にしました。

生物多様性、ひとびと

上原 健

この土日、今年も群馬県みなかみ町の藤原地区、上ノ原入会（いりあい）の森へ出かけました。昨年も同じ時期（10月27日、28日）に「茅場の視察とカヤ刈り体験」に参加するため、みなかみを訪れていました。そのとき、主催の森林塾青水（せいすい）代表の清水英毅さんといろいろお話をさせていただいたのですが、そのときの提案を受け入れていただいたのか、今年は「茅刈り講習会&茅刈りコンテスト」という仕立てになっていました。清水さんから頼まれ

て去年の会報誌に寄せた文章に、私は次のように書いています。

「もし行事を通じて人を集めたいのであれば、懇親会のときに清水さんに提案したのですが、例えば〇〇（企業名）杯「茅刈り選手権」のような形態にして、広報や人集め、参加者の旅行手配などをスポンサー企業にやってもらってはどうか。イメージを高めたい企業にとっても単なる寄付より協力しやすいのではないのでしょうか。」

何とも偉そうなことを書いていますね

（__ __）..... 〇

今年は後援がいっぱい！みなかみ町、群馬県利根沼田県民局、林野庁利根沼田森林管理署、宝台樹スキー場、観光まちづくり協会、藤原案内人クラブ、藤原地区諏訪神社氏子総代、森林文化協会、日本自然保護協会、全国草原再生ネットワーク、森づくりフォーラム、文化遺産を未来につなぐ森づくりのための有識者会議、樹恩ネットワーク、町田工業。また、地球環境基金の助成を受けているとのこと。

参加者も40-50人はいたでしょうか。清水さんのリーダーシップ、森林塾青水の機動力はすごいですね。4月の火入れにもぜひ行ってみたいと思います。



第7回講座「コモンズ村ふじわらーかんじき雪原トレッキング」のご案内

講座「コモンズ村・ふじわら」2008 —ススキ草原は人と生き物の入会地— 第7回 カンジキで歩こう 雪の上ノ原

放置されて森林化が進んだ茅場(ススキ草原)をみんなで手入れして、たくさんの生き物でにぎわうススキ草原に再生しようという実践講座。今回は08年度の最終回。カンジキとスノーシューで、フィールドの「上ノ原入会の森」や雨呼山を散策します。雪の上の動物の足跡や糞など、生き物の痕跡調べも行います。夜の交流会では、来年の野焼きや茅刈りの打合せなどを予定しています。

- ▽とき 2月14日(土)～15日(日)1泊2日
- ▽集合 初日の10時20分、JR上毛高原駅改札口
 - <上越新幹線>東京 8:52—上野 8:58—大宮 9:18—高崎 9:52—上毛高原駅 10:14
- ▽参加費 一般10,000円、会員9,000円(1泊2食、講師謝礼、保険など)。
 - 集合駅までの交通費は自弁
- ▽宿 ロッジ「樹林」(〒379-1721 群馬県みなかみ町藤原3628、電話0278-75-2040)
- ▽服装など 防寒具、オーバーズボンなど、雪の上を歩くのに適した服装で。着替えも。カンジキやスノーシューなどお持ちの方はご持参ください。お持ちでない方は、塾で準備します。お子様をお連れの方は、ソリをご持参するとお楽しみいただけます。
- ▽申し込み 森林塾青水事務局・コミュニティデザイン(浅川潔) / 〒151-0051
 - 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-60-6-702、FAX03-5474-0847、
 - Eメール: asakawa@commonf.net
- ▽応募 応募用紙は別紙、締め切りは1月30日(金)
 - 緊急・当日連絡先は、清水携帯(09035752283)、川端携帯(08054154351)

【1日目】2月14日(土)

時刻	内 容	備 考
10:20 11:30	上毛高原駅集合 倉庫に立ち寄ってカンジキとスノーシューを準備。	
12:00	昼食・休憩(弁当は各自ご持参下さい)	上ノ原又は遊山館
13:00 16:00	●カンジキ、あるいはスノーシューでフィールドを探索。足跡、糞、 糞、樹木の冬芽など、生き物調べと記録を行います。 宿へ	上ノ原又は雨呼山
18:00	夕食 交流会～地元の方と野焼き、茅刈り打合せなど	ロッジ樹林 林親男、雲越万枝、阿部惣一郎さん

【2日目】2月15日(日)

時刻	内 容	場 所
7:30	朝食	ロッジ樹林
9:00 11:00	●雪掘り体験 オプションで、氷柱が見られる大幽(おおゆう)洞窟。天候、積雪状 況によっては中止します。	遊山館
12:00	昼食	ロッジ樹林
13:00	予備時間～雪の藤原を自由に楽しめます	
14:00	解散	
15:19	たにがわ416(上毛高原駅)	

■会員・会友コーナー

○新入会員の紹介

- ・吉野一幸さん～地元民宿「吉野屋」の御曹司にして水上高原リゾート 200 の企画室スタッフ。目下奥さまと、二児の子育て中のヤンパパです！
- ・林 和実さん～海外経験豊富なアウトドア派。茅葺き住宅など我国固有の文化財を大切に、その伝承に尽力したいとおっしゃるヤングシルバー！？
- ・逸見マリオ修三さん～サンパウロ生まれの国際派。長かった海外暮らしの経験から、藤原のような日本の原風景を愛し大切に思う親孝行シルバー？！

○会員の消息～ビッグニュース

- ・中島 武さん～9月7日、小学校「長期自然体験活動指導者」養成講座（全体指導者）の過程を終了されました。文部科学省「青少年体験活動総合プラン」によるもので制度開始第一期生です！ おめでとうございました。（^-o^-）
- ・北山さん一家～藤原へ移住の準備着々進行中。12月3日まで、山口集落の移住予定家屋（茅葺きです！）の床や柱の修理、補強に全力投球。来春には桂月くん（3歳）、瑠那ちゃん（1歳）と愛妻・路加さんの一家4人揃って引越し予定。藤原に「森林塾青水」現地事務所の看板がお目見えするのも間もなくです。（´ー`）

寄稿「同行二人」涅槃編

4. 涅槃の道場（香川編） 川端英雄

● 霊山寺は‘ごじゃや’

2007年8月12日、明治初年「神仏分離令」により遷座させられたもと八幡宮だった68番神恵院と69番観音寺を打つ。境内に境がなく、2寺同居の観がある。そこでのこと。地元の人で‘修行の道場’高知を区切り打ちしている人が、「霊山寺は‘ごじゃや’」と。‘ごじゃや’とは「けしからん、いけない」と言う当地の方言。つまり、白衣・輪袈裟・経本・納経帳・納め札・数珠・線香とろうそく・鈴・金剛杖など、遍路に必要なものの大半を1番寺の霊山寺が販売し、その利益を他寺に分配せず独り占めしていることへの反発を意味している。他寺でも「霊山寺さんは・・・」と、耳にした。

聖なるお寺もお金のこととなると生臭い。案外「地獄の沙汰も金次第」の語はお寺からの広報の発信かも。現に札所ではないが妙音寺に、「讃州の宝を積みて建つ寺の末の世までの利益残せり」の納額があったし、4番寺でも納経帳の押し売りがあったことは既述。

● 歩き遍路は最大の贅沢？

金を受ける寺があれば、支払う遍路がいる。今回、



四国に落としてきた金額は528,938円だったが、最後の2日間を同行した足立区の男性の総支払額は438,941円だったと後で聞いた。野宿を重ねていた若者に途中聞いたところでは、1日平均3,000円程度。40日で完歩したとして12万円程度か。若者とシルバー世代の違いはあるが、お遍路は四国経済にとっては年間200億円以上の「経済価値」があるかと思う。

そんな暇もある、金もある歩き遍路を、‘贅沢な奴等だ’と白眼視する地元の人たちもいると聞く。以って掬すべし。

● 順打ち

今回、八十八ヶ寺を番号順に一気に打った（廻った）けれど、これを業界用語では「順打ち・一気打ち」という。他に区切り打ち、一国打ち、逆打ちがあり、つまり四国内はどのような順番で打っても、どれだけの期間をかけても供養に変わりはないとされている。

しかし、血液型A型の自分にとっては、順番に廻らないとどうも寝覚めが悪く、すべて順打ちを通した。因みに、年間15万人前後の遍路のうち、順打ちかどうかは別として、歩き遍路は約5千人、一気打ちは2千人弱と言われている。団塊世代の卒業を迎えて多少は増加傾向か？もう去年になるが、道中「今年は少し歩き遍路が多いね」との声を聞いた。

● 西の高野山

75番善通寺は大师生誕の地であり、自ら建立された真言宗発祥の根本道場で、境内も広く、建物も貫禄ある大きなもの。西の高野山と称され、四国遍路10回以上達成の「先達」の資格はここで認可される。お遍路＝弘法大師＝高野山、の図式の中で考えていた本山・高野山は意外に‘遍路の世界’では、影が薄い。伝聞ではあるが、‘先達’の公認権を持って集金力を高めた善通寺と言う末寺に、本山・高野山が遠慮している、という説。「お大師さま」として庶民に人気の顔と、国僧としての真言宗開祖の空海の、世俗と権威のギャップ説があるそう。

私が88番まで打ったあと、高野山にお礼参りをした際も、お山では白衣の遍路に関心を持つ人はほとんど皆無であり、納経所の僧も「ここは番外ですから・・・」と素っ気ない。宿坊に入ってまず金剛杖を洗ってから靴を脱ぐという、四国での常識は無視した扱いが定番など、遍路との親和感は薄かった。

きっと、両寺の間で外部に公表できない何か、いつの時にかあったのでしょうか。

● ここでも成果主義やら、優越感やらが・・・

遍路出発前に、参拝先を番外も含めリストアップした。宿泊先もそれなりに旅程を計算して、何日はどこに、と決めておいた。が、1週間もたたずにそれらのご破算となる。慣れるに従い雁行する他の遍路が気になりだす。同宿の遍路が‘今日は何カ寺を打った’‘明日は何時に出て、どこそこまで行くつもり’‘30日台で廻るつもり’などと話していることが耳に入ってくると、あの人より早く着きたい、たくさん廻りたい、と思うようになる。道中追い越されると‘ムムム！’

との心境。優越感と残念・まあ、しかたないかの交錯。何のためにお遍路を始める気になったのか、少し気になる私。

● 無縁塔、^{ちようせき}丁石が並ぶ

涅槃の道場（香川）には遍路道に無縁塔や丁石が多い。とくに、66番雲辺寺を下って観音寺市に入るまでの街道筋では、およそ100mおきに供養等が並んでいるところがあった。中には丁石（1丁は109m）も混じっているが、行き倒れる人がいかに多かったかが窺える。標高910mの雲辺寺の下りを延々と降りてきて、夏場このあたりに水がなかったら……。供養塔1基ごとに手を合わせて通り過ぎる。

香川は今でも夏に湧水が多い。

● 人面獣

2008年は、人面獣である人間の‘獣’部分が一気に噴出してきた年のように思える。いつの時代にも‘獣’部分はあったのだろうが、いまあらためてお遍

路の「お接待の精神」「利他の心」を思い返してみたい。ブータン前国王が唱えるGNH（gross national happiness）は、わが国では「吾唯足知」（われただたるをしる）の語で知られているが、寡欲と思いやりの精神を取り戻したい。

歩きであれ、車であれ一度お遍路を体験すると、粗末な食事だけで充足の1日が得られることが多いと思う。うまくいけば、涅槃＜煩惱を断じた絶対的静寂の状態。仏教における理想の境地＞にも1歩近づけるかも知れない。賢兄、賢姉、チャンスがありましたら、一度遍路にトライされてみてはいかがでしょうか？
＜4. 涅槃の道場・完＞

4回にわたり連載してきた「お遍路」も今回で最後です。よしなしごとを連ねた拙文にお付き合いいただき、ありがとうございました。

■ 編集後記 ～ 塾長のつぶやき

●9月、草原再生セミナー。素人集団初の主催事業で大変だったが、学ぶところ大なるものがあった。戦後、日本の里山が失った最大のもの森でも田んぼでもなく草原であったこと。それにつれて、草原性の生き物の多くが絶滅の危機に瀕していること。万葉の昔から歌に詠まれ親しまれてきた「秋の七草」は「五草」に、子どもたちは既に“原っぱの絶滅危惧種”になっていた。秋和16年、多摩川上流で生まれ育った我等「ミズガキ族」はとくに絶滅種寸前を自認していたが、ハラガキ族も同様と知って驚きながらも納得。なるほど、都会のジャングルでミユキ族やタケノコ族が繁茂している間に、田舎の古来種（在来種）たちは棲家を失ってしまったという訳か……。

「傲慢」の世紀の果ての枯野かな

●10月、茅刈り講習会&コンテスト。先例のないことで難易度・ウルトラCだったが、嬉しいことに親子連れが6組も参加してくれた。子ども達の歓声や泣き声がススキ草原に鳴り響いた。いなくなった筈のハラガキ達が戻ってきてくれた感じ。迎えた我々スタッフも大歓迎だったが、地元の皆さんの嬉しそうな笑顔がととても印象的だった。そうだ、我々ジイジ・バアバ世代も孫たちを連れて来れば良いのだ。でも、彼らの親世代（つまり、我々の子世代）をどう説得するか……。こっちの難易度は超ウルトラC？！

●昨年の秋、上原さんからいただいた貴重なご提案。

「〇〇杯茅刈り選手権のような形態にして、広報や人集めから旅行手配までスポンサー企業にやらせよう。企業にとっても、イメージアップにつながり単なる



寄付より協力しやすいのでは……」といった趣旨であった。スポンサー探しは出来なかったが、コンテスト形式は採用させていただいた。自前でやる手間は大変だったが、その代わり大きな収穫があった。



みなかみ町をはじめ多くの有力団体に後援をお願いし、役場や地元の皆さんと何回も事前打合せを重ねた。お陰で当日も、利根川の上流から下流まで大勢の皆さんに参加していただけた。地元集落だけでは維持・管理出来なくなった茅場という元・入会山で、市民団体と地元行政と住民がそれぞれの立場でかわり茅刈りコンテストが開催出来た。我々の指向する、「現代版の入会い」の様相が形成されつつあるのではなかろうか。開会式で林親男さんが「上ノ原に人がこんなに大勢が集まったのは最後の茅刈りをやった昭和35年に以来のこと……」とご挨拶されたのを思い出し、その感を強くした。

●「人と生き物が入り会うコモンズ村ふじわら」を標榜して5年。今年、どうみても平均年齢60歳台の当塾に若い仲間が次々加わってくれた。なかでも、地元の吉野（一）さん、金子さん、間もなく移住予定の北山さん達は子育て世代。そして、来春からは林（和）さん、逸見さんの海外キャリア組も草原デビューの予定。このところ、よく見かけるようになったオミナエシやハハコグサ、センボンヤリ達に加えてハラガキやミズガキOB達も原っぱに戻ってくる。現代版入会い＝日本型コモンズの形成にむけて一歩前進。そんな楽しい初夢をみたいもの。

茅原に子らの歓声天高し (青)